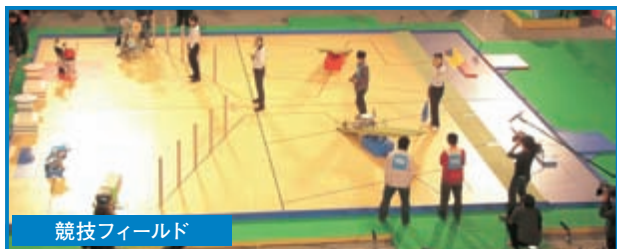


## 競技内容

今回のテーマは「ふるさと自慢特急便」。各チームは地域の協力を得て、地元になんだ特産品を模した「ふるさとオブジェ」をロボットに積んで運び、「ふるさとゴール」と呼ばれるテーブル上に載せるまでの速さを競う。

ゴールに至るまでには、「お堀」「シーソー」「スラローム」「縄跳び」の4つの障害が設定されており、3分以内にトレイに載せたオブジェを落とさずにクリアしなければならない。しかも、オブジェは縄跳びのとき以外、機体に固定することができないのだ(オブジェを載せたトレイが20°傾いたら、オブジェは自然にすべり落ちなければならない)。そのため、オブジェが落ちないようにする工夫も見所となった。



競技フィールド

## 大会結果

前回同様、各チーム間の妨害ができないため、ベストタイムを出すことが結果に直結する競技となった。地区大会では出場124チーム中5チームしかゴールできなかったという難しいルールで、主催者側も「ちょっと難しすぎたかな」と思ったそうだが、さすがに全国大会に選出されたチームたちは、地区大会後に改良を重ねたのか、当たり前のようにゴー

ルを連発するようになっていた。全国大会当日は、24試合中21試合がゴールで決着し、見ごたえのある勝負が繰り広げられた。

昨年準優勝し、ロボコン大賞を受賞した東京高専「雷門兄弟」がほんの数秒の差で初戦敗退するなど、一瞬の隙も許されない戦いが続く中、順調に勝ち進んだのは詫間電波高専の「ARK」。1回戦で1分14秒という圧倒的なタイムで勝利すると、その後は勝ち進むごとにタイムを縮め、決勝では1分3秒の大会最速タイムで優勝を決めた。

準優勝は和歌山高専の「ウメタロウ」。こちらも全国大会でのベストタイムは詫間電波高専に次ぐ記録を持っていたのだが、決勝では今一步及ばなかった。今回特設された「ふるさと自慢賞」には、丹頂鶴の彫り物を採用した釧路高専「韋駄天」が選ばれた。

そして、この大会独特といえる、「優勝を超える名誉のある賞」とされるロボコン大賞は、優勝と同じく詫間電波高専「ARK」に。大会史上初のトーナメント優勝とのダブル受賞となった。

ロボコン大賞	詫間電波高専「ARK」
優勝	詫間電波高専「ARK」
準優勝	和歌山高専「ウメタロウ」
アイデア賞	沖繩高専「行進中」
技術賞	徳山高専「パンダ倶楽部」
デザイン賞	近畿大学高専「Libra」
ふるさと自慢賞	釧路高専「韋駄天」



「ふるさと自慢賞」に選ばれた、釧路高専「韋駄天」。

## お堀ゾーン

お堀の奥行きは150cm(中央に浮島あり)で、お堀の中央や浮島の側面に触れることはできない。今回はオブジェを固定できないこともあってか、お堀全体を一気に飛び越えるような機体は出場していなかった(地区大会にはいたようだ)。ほとんどのチームは、前後に伸びるアームを組み込み、浮島をステップにして、常に2点以上で機体を支えるようにして越えていく方法を取っていた。

スピードのあるチームは、スタート直後、前後いっぱいまで伸びて「前進するだけ」でお堀を越えていた。一方、お堀

越えに微調整が必要なチームは、操縦ミスによりオブジェを落としてしまうような場面も見られた。



自分で敷いたレールを渡る、旭川高専「セタ」。渡りきったあとは自動的に巻き取る構造になっていたが、うまく動作しなかった。



沼津高専「詫びサビ」。横から見ると、スタート時には正方形の機体が、スタートと同時に平行四辺形へと変形し、ゴロンと転がることでお堀を渡ろうとした。普通にクリアしたのでは面白くない、というチャレンジャー精神に拍手。